平成30年度第１学期終業式式辞

第１学期の節目に当たって思うこと

校長　原　田　尚　昭

今年度の第１学期も本日をもって一応の区切りを迎えます。生徒の皆さんにとっては、どのような学期であったでしょうか。１年生の諸君にとっては、高校生活が始まって、勉強と部活、或いは学校行事の一つ一つが初めての経験ばかりで、不安なことも多かったのではないでしょうか。２年生にとっては、特に部活動で３年生が引退を迎え、今丁度新しい体制づくりに取りかかって、中堅学年としての責任の重さを正に今ひしひしと感じ始めているのではないかと思います。３年生諸君は、言うまでもなく最終学年としてこれから自らの進路決定に向かって邁進していかなければなりません。就職であれ、進学であれ、「この方向、この夢を実現！」という進むべき道を決定して、毎日汗水垂らしながら必死になって人生を切り開く「力」を身につける時です。今日という日が、生徒の皆さんがそれぞれの歩みを振り返り、次なる確かな一歩を見定める大事な日となることを強く願っています。

さて、この１学期は、６月18日朝の大阪府北部地震と７月初旬の西日本豪雨災害という、予想もしなかった二つの大変な災害に見舞われ、この宍粟市でも大きな被害がありました。地震と豪雨災害。私は、過去に私たちの身近で起こった二つの災害をいつも思い出します。一つは、昭和51年９月13日の一宮町下三方地区での山津波。台風17号による豪雨で、大きな山が崩れて３名の方がお亡くなりになりました。そして、もう一つは昭和59年５月30日の山崎断層地震。安富町の植木野地区が震源地で、本当に地の底からゴォーという大きな地鳴りがして、家も崩れるかと思うぐらい揺れたのをよく覚えています。このような大変な災害が起こるたびに、私は、それが決して他人事ではなくて、被害に遭った方々の苦しみに心を寄せる、共感することが非常に大事であると思っています。その意味で、今回も生徒会の諸君がいち早く毎朝昇降口の所で募金を呼びかけてくれたり、また、明日も野球部や卓球部の人たちを中心にして有志の諸君が波賀町の奥の土砂災害の地へとボランティア活動に行ってくれるということで、本当にありがたいと思っています。宜しくお願いします。

この１学期が始まる時、４月の始業式で私は「挨拶」をすることと「腰骨を立てる」こと、そして「校歌を大きな声で歌える学校に」と呼びかけました。毎朝８時頃から校門に立って、皆さんが登校する様子をじっと見て、そして大きな声で「おはよう！」と声をかけてきたのですが、少しずつ挨拶をしてくれる人は増えてきたかなとは思いますが、私の中ではまだまだだと思っています。校歌にあるように、「朝の挨拶は、心の扉を開く音」です。気持ちの良い朝の挨拶を心がけましょう。また、皆さんが授業や模試を受けている様子を時々見て思うのですが、腰がぐにゃっと曲がってしまってきちんと立っていない。姿勢の悪さは生き方に繋がってきます。一日一回でも朝にきちんと腰骨を立てて、気合いを入れる時間を持ちましょう。そして、校歌ですが、この後どのような歌声を660名の皆さんが聞かせてくれるか、楽しみです。

「挨拶」、「腰骨」、「校歌」。簡単な事ですが、続けるとなると難しい。しかし、続ければ、それは必ず本物になります。皆さんが、新たなる自分を見つけて本物を目指す、そんな有意義な夏休みとなることを願って、本日の式辞とします。